

浜田市はなぜ石見神楽の創出地とされるのか
——創出説の根拠と妥当性——

- 第1章 はじめに
- 第2章 石見神楽の概要
- 第3章 石見神楽の歴史的変遷
- 第4章 地域ごとの石見神楽
- 第5章 浜田市が創出地とされる根拠
- 第6章 他地域における起源説
- 第7章 結論



図1 島根県大田市龍御前神社における温泉津舞子連中「塵輪」の上演風景
出典：筆者撮影（2025年1月5日）



図2 島根県江津市敬川八幡宮における有福温泉神楽団「大蛇」の上映風景
出典：筆者撮影（2022年12月4日）

第1章 はじめに

研究の背景

石見神楽の公式サイトや観光資料では、「石見神楽を創り出したまち浜田」という表現がしばしば用いられ、浜田市を起源とする文化として強調される傾向がみられる。しかし、安西生世（あんざい いくよ）（2025b）が「石見神楽の演目『鐘馗』の形成と内容」『東アジア文化研究』第12号において指摘している（安西 2025b、pp.219-222）。

石見神楽の礎を築いた神職神楽の成立時期や、成立地域などはいまだ不明なことが多い。また、近世以前の石見地域は、支配統治機構が複雑なうえ、当地の神職家のなかには、修験山伏だけではなく、武士の系統を引く人びとがいたこともあって、ある特定の宗教者・宗教集団や、出雲・佐太の宮川兵部少輔秀行（1608年頃）や備中・高梁の西林國橋（1804年頃）のような特定の創始者がいたか定かではない。

以上の指摘から分かるように、石見神楽がいつ、どこで生まれたのかについては、まだ不明な点が多く、発祥地を特定の地域に限定して断定することは難しい。また、「創り出す」という言葉は、まったく新しいものを生み出すという意味を持ち、もともとの形を受け継ぎながら発展させた場合には当てはまらない。したがって、「石見神楽を創り出した」とする浜田市の表現は、語の本来の意味と合わない可能性がある。この点を踏まえ、本稿では当該表現の適切さについて検討する。

研究目的

浜田市の創出地説の根拠と限界を様々な視点から検証する

研究方法

文献調査、地域比較、インタビュー調査を通して研究を行う。

第2章 石見神楽の概要

① 石見神楽とは

石見神楽公式サイト（2025）『石見神楽について』によれば、

石見神楽の起源は定かではなく近世以前とされているが、文化文政期の国学台頭とともに古事記・日本書紀を原拠とする神話ものが加わり、演目も豊富で極めて多彩である。

往時、神の御心を和ませるという神職によつての神事であったものが、明治政府から

神職の演舞を禁止する達しが出たことにより、土地の人々の手に受け継がれ、民俗芸能として演舞されるようになった。そのリズムは、石見人の気性をそのままに、大太鼓、小太鼓、手拍子、笛を用いての囃子で演じられ、見る人を神話の世界に誘う。また、石見神楽はその詞章に特徴がある。荘重で正雅な古典的なその言葉は、里神楽には極めて稀だといわれており、その中に織り込まれた土の香りの高い方言的表現、素朴な民謡的詩情とともに独特のものをつくりあげている。

以上の指摘から、石見神楽の詞章には、地域の人々の暮らしや感覚が色濃く息づいている。荘重で古典的な表現に加え、方言的な語彙や民謡的な詩情が織り交ぜられることで、独自の芸能世界が形づくられているのである。こうした表現のあり方は、石見神楽がただの芸能ではなく、地域社会の精神性や共同体のつながりを映し出す文化であることを示している。

② 舞・囃子などの構成要素

石見神楽の囃子は、六調子と八調子の二つがある。石見神楽公式サイト（2025）から六調子については、

石見地方山間部、江の川流域を中心とした大元神楽等でみられる、石見神楽の原型と言えるものである。囃子は比較的緩やかであり、舞手も重心をぐっと落とした姿勢で舞を展開する。特徴的な足のはこびとして「抜き足」といい、腰を浮かせず後ろの足を抜くように上げて前に打ち込むという所作があるが、これは泥田を歩くかつての労働の動作に通ずるところがあるといわれている。

以上の指摘から、六調子神楽は石見神楽の原型を示す素朴で重厚な様式であり、地域の生活文化に深く結びついた舞が特徴であると言える。

また、八調子については、

石見地方の海辺において盛んに舞われているのが八調子神楽である。明治初期、浜田の国学者藤井宗雄、牛尾弘篤両氏の手により、伝来の神楽(六調子神楽)が大幅に改訂されてできたものといわれており、速いテンポで囃子、舞手が舞いを展開するのが特徴で、漁業の町であった浜田の人々の気質と合って発展し、蛇胴の考案、花火の使用、金糸・銀糸の豪華絢爛な衣裳等、様々な革命がなされた。これらは他県の神楽にも多大に影響を及ぼすこととなる。

以上の指摘から、八調子神楽は浜田を中心に形成された革新的な様式であり、その速い囃子や華麗な演出が他地域にも影響を及ぼしたことが分かる。

第3章 石見神楽の歴史的変遷 ― 浜田市の役割 ―

① 神職演舞禁止令と氏子への継承（明治期）

明治期になると、神職演舞禁止令が出て石見神楽が大きく変化を遂げた。山本健太（2021）が「島根県西部地域における石見神楽の存立構造」『國學院大學紀要』第59号において指摘している（山本 2021, p.38）。

明治期になると、政府によってなされた神職の演舞禁止などの影響から、地域の氏子が神楽を継承することになった。第1表より継承団体の設立年をみると、明治期以降に設立されたものが大半を占める。とりわけ明治初期に最も多くの継承団体が設立されていることがわかる。当該期には他の地域でも多くの継承団体が氏子を中心に結成されている。これは政府による神職の演舞禁止を受け、社家による神楽の継承が難しくなり、氏子連中による継承がされ始めたことによると推察される。また、昭和初期には団体の新設が見られない。当該期は第二次世界大戦の時期にあたり、戦時体制下での神楽継承団体の新設は困難であったと考えられる。近年では、1999年や2011年など、設立年の若い団体もみられる。

以上の指摘から、明治期の神職演舞禁止令は、当初は神楽の衰退を招く要因であったと考えられるものの、実際には氏子を中心とする地域住民による新たな継承の契機となったことが分かる。神楽団体の設立が明治初期に集中していることは、その変化が急速かつ広範囲に及んだことを示している。また、戦時体制下には継承活動が停滞したものの、戦後には再び団体の設立が進み、近年でも新しい団体が創設されていることから、石見神楽が地域社会のなかで柔軟に再生、発展してきたことが理解できる。すなわち、神職演舞禁止令は石見神楽の継承主体を大きく転換させ、氏子による民俗芸能としての新たな発展を促した重要な契機であったと言える。

② 演目「大蛇」の成立と蛇胴の発展

浜田市商工会議所『浜田の石見神楽』（2023, p.38）より、「蛇頭をかぶり、鱗形を描いた襦袢を着て、櫛を手に持ち横臥の状態で舞っていた大蛇を、浜田市熱田町の植田菊一氏が、『棒提灯』から淡竹と石州和紙で作る蛇胴を考案し各地に普及させました。」と、述べている。この考案は、石見神楽における「大蛇」の表現方法において重要な革新をもたらしたと評価できる。従来は襦袢を用いた簡素な表現に留まっていたが、淡竹と石州和紙を素材とした蛇胴の導入により、蛇の体軀を立体的かつ迫力ある形で舞台上に再現することが可能となった。その結果、演者の動きと蛇胴のしなやかな造形が一体化し、観客に対して強い視覚的效果と臨場感を与える舞台表現が実現した。さらに、この改良された蛇胴は各地に普及し、

現在に至るまで「大蛇」の演目を代表する舞台装置として定着していることから、植田菊一氏の功績は石見神楽の演出表現の発展において極めて大きいといえる。蛇胴の開発は浜田市において行われ、従来には存在しなかった「胴体」という概念を舞台表現に取り入れた点においても、創作性の高い革新的な取り組みであったと評価される。

③ 神楽面の変化（木彫から和紙へ）

浜田市商工会議所（2023, p.38）は、「明治期の神楽改正の折、従来の木彫面は重量があり、動きの速い八調子神楽には不向きであるとして、より軽い『張り子面』を長浜の人形師・木島仙一氏に依頼し各種考案させました。浜田の長浜には優れた人形師が居り、木彫と見間違えるほど彫りの深い張り子面を和紙で作り上げる技術を持っていました」と述べている。このように、浜田の石見神楽における「張り子面」の導入は、単なる道具の軽量化に留まらず、舞台表現の発展と演技表現力の拡張において重要な役割を果たしたと評価できる。特に、軽量で扱いやすい面の採用は、演者の俊敏な動作を可能にし、八調子神楽特有の躍動かつ迫力ある舞いを支える基盤となった。一方で、面そのものは神楽の歴史において古くから存在していたため、浜田市が全く新たに創出したわけではないことに気を付ける必要がある。この点を踏まえると、張り子面の導入は改良、技術的革新として位置付けるのが妥当であり、浜田における人形師の技術的貢献が、石見神楽の舞台表現の質を高める契機となったことが明確である。

④ 笛の構造改変と八調子の発展

浜田市商工会議所（2023, pp.38-39）は、「戦後、浜田市浜長町の船木春吉氏が、楽に吹けるようにと研究し、リコーダー式の歌口を横に付け、吹き込むだけで音が出るようにしたのが始まりです。これにより、多くの方が容易に神楽笛を吹けるようになりました」と指摘している。このような改良は、神楽笛の習得に伴う技術的負担を大幅に軽減し、演奏者の裾野を広げる機会を提供した点で重要である。神楽笛の改良は単なる楽器の利便性向上に留まらず、戦後の石見神楽の再生と普及に寄与した文化的革新として評価できる。一方で、神楽笛そのものは神楽の歴史において古くから存在していたため、浜田市が全く新たに創出したわけではないことに留意する必要がある。この点を踏まえると、歌口の改良は技術的改良・革新として位置付けるのが妥当であり、浜田における演奏技術の普及促進に重要な役割を果たしたことが明確である。

第4章 地域ごとの石見神楽

① 石央地域の神楽

浜田市を中心とする石央地域の石見神楽について、石見神楽公式サイト（2025）によれば、

大阪万博での上演を機に石見神楽は全国に知られるようになり、海外公演も幾度も行われ、日本文化の交流にも一役買ってきた。そのスケールの大きさとダイナミックな動きで絶賛を得た「大蛇」を含め、演目は30種類以上にのぼり、例祭への奉納はもとより、各種の祭事、祝事の場に欠かすことのできないものとなっており、広く誇れる郷土芸能である。

古くは蛇胴の発明や花火の使用等で見る者の度肝を抜き、昨今では、地域の物語などを神楽化した各社中ごとの創作神楽や、舞台演出を凝らしたステージ神楽も台頭しており、伝統芸能としては希な広がりを見せてきているのも石見神楽の特徴である。

以上の指摘から、浜田市を中心とする石見地域の石見神楽は、例祭奉納を基盤としながらも、演出や創作を積極的に取り入れ、地域内外へと発信される「魅せる神楽」として発展してきたことが分かる。

② 石西地域の神楽

益田市を中心とする石西地域の石見神楽について、浜田市（2024）「益田の石見神楽と歴史と変遷Ⅲ」によれば、

益田以西は山口県に近いところは独自の六調子神楽が伝わり、柳神楽（津和野町）、抜月神楽（吉賀町）、三葛神楽（匹見町）などのように、それぞれの八幡宮神職から伝授された独自の神楽として伝承されている。益田以西は八調子神楽とされているが、浜田や鹿足の神楽とも違い「石西の神楽」として紹介されており、益田の神楽は和紙面とともに木彫りの面、五神の巨大な面などがあり、舞い方や奏楽も浜田とは異なり、道返し（鬼返し）、エビスなども独自の舞を伝える。

以上の指摘から、益田市を中心とする石西地域の石見神楽は、浜田地域とは異なる様式を持ち、六調子・八調子の要素が混在しながら、神職由来の伝統を基盤とした独自の神楽文化が形成されていることが分かる。

③ 石東地域の神楽

石東地域である大田市の石見神楽について、石見銀山神楽連盟（2025）『島根県大田市の石見神楽』によれば、

島根県大田市は、石見地方と出雲地方の境界にあり、上演団体によって「神楽のおもむき」が全く異なる面白い土地です。

出雲から伝わった奥飯石系の神楽、浜田系八調子、広島系の神楽があります。

さらに、神社例祭の奉納神楽、すべて子どもが演じる子ども神楽や、海辺で行われる海神楽、定期公演や各種イベントでの神楽の上演など、上演の形態でも多種多様な石見神楽を堪能することができます。

以上の指摘から、大田市の石見神楽は、複数の系統や上演形態が共存する、多様性に富んだ神楽文化であることが分かる。

④ 邑智郡の神楽

邑智郡の石見神楽について、公益財団法人邑智郡広域振興財団編『邑智郡神楽ガイドブック』(2021, p.13)によれば、邑智郡では大元神楽を中心とした古い様式が色濃く伝承されており、地域ごとに異なる舞や囃子が受け継がれている。

古来の神楽伝統が残されてきました。石見神楽の源流ともいわれ、今も大元神の祭儀の伝統を守る大元神楽です。邑智郡の神楽の特色はこの大元神楽を伝承している点にあります。大元神楽は国の重要無形民俗文化財に指定されています。もちろん神楽の盛んな土地柄ですから、ほかにも新しい感覚の広島県北地方の新舞を取り入れた神楽団や浜田地方の影響を受けた神楽団も活発に活動しています。

以上の指摘から、邑智郡の石見神楽は、大元神楽という古来の伝統を基盤としながら、他地域の影響も受けつつ、多様な神楽文化が共存している地域であることが分かる。

第5章 浜田市が創出地とされる根拠 (インタビュー調査 浜田市観光協会 会長 中山良一氏)

浜田市が石見神楽の創始地とされる根拠

石見神楽が発展した背景には、衣装、お面、蛇胴がまず浜田市から生まれたという事実がある。特にその材料として石州和紙(せきしゅうわし)の存在が大きかったと指摘している。お面や蛇胴も石州和紙がなければ、お面も蛇胴も作れなかった可能性が高い。和紙面には「市木面(いちぎめん)」と「長浜面(ながはまめん)」の違いがあり、浜田市が手掛けたのは、長浜面であり、長浜面は型を壊して原形を取る脱活と呼ばれる技法を使い、鼻が垂れ下がったような造形も可能で、これが特徴的だ。長浜面は元々、長浜人形の型から発想を得たイメージだと言及しています。神楽団体(社中)の多さと歴史も特徴的で、浜田市には面や衣装などの産業があるため、神楽の団体が他の地域よりも断トツに多くなったと考察している。古い団体として上府や有福神楽を挙げ、上府が明治3年、有福神楽が明和元年といった、長い歴史を持つ団体が浜田市には存在していると主張している。

第6章 他地域における石見神楽 (インタビュー調査 石見神楽 神楽伝承者)

A. 石東地域—大門克典氏（温泉津舞子連中 副代表）

浜田市が「石見神楽のメッカ」と主張しているのは以前から知っており、「創り出した」というフレーズも「まあ、そうなのかな」と受け止めている。くわえ笛やお面なども創り出したではなく改良したという認識でいる。だから、なぜ創出地というのか疑問に思うことは多くある。「石見神楽」と一口に言ってもエリアが広い。「浜田系八調子神楽」であれば浜田がメッカで「創り出した」と言っても良いが、大田市には「奥飯石（おくいし）系」の神楽が色濃く残っている。大田市には浜田系、広島系、奥飯石系など様々な団体が存在する。浜田系の派手さや見せ方の影響は受けている可能性はあるが、大田市は「大田の神楽」として独自のポリシーを持っている。例として、三瓶（さんべ）の「多根神楽（たねかぐら）」は、自分たちの神楽を「石見神楽」や「出雲神楽」といった枠ではなく「多根神楽」というアイデンティティで呼んでいる。このように、必ずしも「石見神楽」というフレーズにとらわれない地域柄がある。大田市は浜田市と（神楽の系統や活動において）若干距離がある。また、活動団体の数も浜田ほど盛大ではない。そのため、浜田市の主張（キャンペーン的な側面もあると理解）に対して、「おいおい」と目くじらを立てたり、嫉妬したり、反論したりする雰囲気ではない。どちらかといえば、「まあ、言っていられっしょね」という冷静な空気感で受け止めている。

B. 石西地域—石橋真美（益田市観光協会 職員）

その浜田市が「石見神楽を創り出したまち」ということを主張するのは、浜田市に産業が多く、特に「ものづくり」という観点で石見神楽を生み出した町として見ているからです。島根県観光連盟もその観点から、「産業が今でも継続して事業として存在している浜田市が言うことなのだろう」と認識されています。お客様がおっしゃるように、私の地元にも木彫り面があり、種神楽、三谷、真砂、久城、道川といった神楽の団体がありますので、「いやいや、創り出した町というのは誤解で、私たちも創っている」とは言います。しかし、「創り出した町というのはものづくりの観点から見ているのだ」という説明を受けると、「ああ、確かにそうなのかもしれない」と思ってしまうところもあります。そのあたりについては、特に観光協会の一職員としては、もう今は全く持つてはおりません。

C. 邑智郡の神楽 — 小笠原 昇氏（忍原地頭所神楽団 団長）

私個人としては、「浜田が元祖だ」と言われても、あまり気にしていません。自分たちの神楽を一生懸命に舞うことが大切であり、他所のことはあまり気にならない、というのが正直なところ。神楽の起源について、私が教わったのは島根県の邑南町にある「大元神楽団」が発祥だという話です。そこから浜田や広島などへ広がり、それぞれの土地で独自の伝統が築かれてきたと聞いています。広島神楽についても、もともとは神事として

神社でのみ舞われる奉納舞でした。舞うことを許されていたのは宮司や神社関係者だけでした。しかし第二次世界大戦後、GHQの指示により神楽の廃止が求められ、一時は途絶えかけました。けれども村人たちは「これはなくしてはいけない」と考え、宮司から密かに神楽を学び、「里神楽」という名称で再び舞い始めたのです。これが現在の神楽の始まりだと私は教わりました。ただし、本当に「大元の大元」がどこなのかと言われると、私自身もはっきりとは分かりません。例えば広島県の芸北町の神楽は六調子を基本としていますが、冒頭の調子は浜田の「ドンチチ」に似たものを取り入れています。これは当時、芸北の人々が浜田へ学びに行き、その調子を取り入れたためだと聞いています。その後、途中から旧舞に戻るという独特の構成を持ち、非常に面白い神楽となっています。このように島根県や広島県には多様な神楽があり、それぞれが独自の文化を築き上げてきました。だからこそ、「どこが発祥なのか」を一概に言うのは難しいのではないかと、私は思っています。

第7章 結論

1. 浜田市が「創出地」とされる理由の整理

本稿では、浜田市がなぜ「石見神楽を創り出したまち」と言われているのかについて、文献調査や地域比較、インタビュー調査を通して検討してきた。その結果、浜田市が石見神楽の「創出地」とされる理由は、石見神楽そのものを最初から生み出したという意味ではなく、近代以降の石見神楽の発展において大きな役割を果たしてきた点にあることが明らかになった。浜田市では、八調子神楽の形成をはじめ、蛇胴の考案、張り子面（長浜面）の導入、神楽笛の改良など、舞台表現に関わる多くの工夫や改良が行われてきた。これらは、石見神楽をより迫力のある、見せる芸能へと発展させる要因となり、その影響は他の地域にも広がっていった。また、浜田市には石州和紙をはじめとした神楽に関わる産業が集まっており、そのことが神楽団体の多さや活動の活発さにつながっている。このように、浜田市は石見神楽の発展と普及を支える中心的な地域となってきたため、「石見神楽を創り出したまち」と表現されるようになったと考えられる。

2. その根拠の妥当性に関する最終的見解

一方で、浜田市を石見神楽の「創出地」と断定することについては、慎重に考える必要がある。石見神楽の起源は近世以前にさかのぼるとされているが、いつ、どこで生まれたのかははっきりしておらず、特定の地域だけを発祥地とすることは難しい。また、本稿で取り上げた蛇胴や神楽面、神楽笛などは、浜田市で新しく改良されたものであり、まったく新しいものがゼロから生み出されたわけではない。つまり、浜田市の役割は「創出」というよりも、「改良」や「発展」に近いものだと言える。さらに、他地域の神楽関係者へのインタビューからは、浜田市の功績を認めつつも、「創り出した」という表現には違和感を持っている人がいることも分かった。石見神楽は地域ごとに特徴を持ち、それぞれの

土地で大切に受け継がれてきた文化である。以上のことから、浜田市が石見神楽の「創出地」とされるのは、学術的に起源を示す言葉というよりも、石見神楽を大きく発展させ、広めてきた地域であることを強調した表現として理解するのが適切であると結論づけられる。

3. 今後の研究課題

今後の課題として、まず石見神楽の成立について、より古い資料や記録を用いた調査を進める必要がある。特に、邑智郡の大元神楽や石東、石西地域の神楽との関係を詳しく調べることで、石見神楽の歴史をより深く理解できると考えられる。また、本研究では主に島根県内を対象としたが、広島神楽や出雲神楽との比較を行うことで、石見神楽の特徴をよりはっきりさせることができるだろう。さらに、「石見神楽を創り出したまち」という表現が、観光や地域振興の中でどのように使われてきたのかを分析することも、今後の重要な研究課題である。石見神楽を一つの起源にまとめるのではなく、さまざまな地域が関わりながら形づくられてきた文化として捉える視点が、今後ますます重要になると考えられる。

参考文献

- ・安西生世 (2022a) 「石見神楽の演目『大蛇』の誕生：オロチが物語る石見神楽の文化と技術」『伝承文化研究』第19号、pp.92-110
- ・安西生世 (2025b) 「石見神楽の演目『鐘馗』の形成と内容」『東アジア文化研究』第12号、pp.209-240
- ・安西生世 (2025c) 「石見神楽面（長浜面）に関する調査報告と試論（1）：第一回 旧永見家人形型および面型調査より」『山陰民俗研究』第30号、pp.73-91
- ・諏訪淳一郎 SUWA Junichiro (2002) 「『石見神楽』：民俗芸能の現在進行形として」『総合政策論叢』第3号、pp.47-60
- ・浜田市商工会議所 (2023) 『浜田の石見神楽』、pp.1-154
- ・浜田市 (2024) 「益田の石見神楽と歴史と変遷Ⅲ」, 浜田市公式資料, 2025年12月12日閲覧,
https://www.city.hamada.shimane.jp/www/gikai/contents/1711961657656/simple/R060518_ashitani_kensyuhoukoku.pdf

- ・公益財団法人邑智郡広域振興財団（2021）『邑智郡神楽ガイドブック』, pp.1-22
- ・山本健太（2021）「島根県西部地域における石見神楽の存立構造」『國學院大學紀要』第59号、pp.29-49
- ・石見神楽公式サイト（2025）『石見神楽とは』、2025年12月12日閲覧、
<https://iwamikagura.jp/about/>
- ・石見銀山神楽連盟（2025）『島根県大田市の石見神楽』、2025年12月12日閲覧
<https://www.iwamiginzankagura.com/>

インタビュー

- ・石橋真美（2025）島根県益田市観光協会 職員 インタビュー（2025年12月4日）
- ・小笠原 昇氏（2025）忍原地頭所神楽団 団長 インタビュー（2025年 11月26日）
- ・中山良一氏（2025）一般社団法人 浜田市観光協会 会長 インタビュー（2025年 11月11日）
- ・大門克典氏（2025）温泉津舞子連中 代表、インタビュー（2025年 11月12日）